

國學院大學學術情報リポジトリ

【令和五年度人間開発学部学部共同研究成果報告】
熟達保育者による手遊び実演が幼児のフロー体験に
与える影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳生, 崇志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001531

令和五年度人間開発学部学部共同研究成果報告

熟達保育者による手遊び実演が幼児のフロー体験に与える影響

研究代表者 柳生 崇志

【研究テーマ】

熟達保育者による手遊び実演が幼児のフロー体験に与える影響

【研究代表者】

柳生崇志（國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授）

【共同研究参加者】

中野圭祐（國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）

青木康太郎（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

結城孝治（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

塩谷 香（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

野澤純子（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

【研究概要】

〈研究の目的〉

幼児を対象にした手遊びは保育場面で長年親しまれてきた主要な遊びの一つであるが、その本来的な意義である手遊び自体

の楽しさが保育者のどのような技術や考えによってもたらされ、またその楽しさがどのようにして幼児に伝わり楽しんでいるかについてはこれまであまり論じられてこなかった。そこで本研究では、保育者が手遊びを実演する際の技術や意図を分析するとともに、その手遊びによって生じる幼児の楽しく遊び込む体験（フロー体験）の様子を関連づけて考察し、手遊びが幼児の注意を引くための道具的役割ではなくそれ自体が十分に楽しい遊びであることの重要性を示すことが目的である。

〈研究の方法〉

保育熟達度の異なる複数の保育者が実演する手遊びを観察（動画撮影）し、その技術的側面の分析と再生刺激法による保育者の技術や意図に関するインタビュー調査、および保育者による幼児の反応評価を行った。また、幼児の反応についても三六〇度撮影可能なビデオカメラを含む複数台のビデオカメラを用いて観察（動画撮影）を行い、発話、表情、行動等について分析した。

【研究成果】

〈結果の整理〉

都内T幼稚園の年少1クラス、年中2クラス、年長2クラスのそれぞれの担任教諭（計5名）が実演する手遊びを二日間ずつ観察した。

一日あたりの手遊びの演目数や内容については統制せず、生活の流れの中で次の活動（例えば、昼食、園外散歩、降園時の集まり等）の前の約10分間で実施された。手遊び実演後には保育者にインタビューを行い、演目選択の意図、技術的工夫、幼児の反応等について聞き取りをした。

幼児のフロー体験の分析については、現象見本法による観察記録に基づき観察者が幼児の表情や行動の評定を行なった。

〈事例の分析と考察（熟達保育者と非熟達保育者の比較、一部のみ抜粋）〉

「ペンギンマークの百貨店」の際の1コーラス毎の間の取り方に着目すると、熟達保育者Aは「チワワを抱っこする際に可愛がる時間をとる」「打ったボールの行方を追う」「携帯電話で通話をする」、熟達保育者Bは「誰か一人の幼児を指差す」「どのペットを飼うか幼児の意見を聞く」「打った球の行方を追う」など、その時々でアドリブの動きを取り入れていた。それにより、幼児には「今日は何が起ころのか」という興味が芽生え、既に座って手遊びに参加している幼児だけでなく、手を洗ったリ荷物の準備をしたりしている幼児も教師の言動に興味を持ち、一緒に楽しんでいることがうかがえた。一方、非熟達保育者Xは、コーラス毎に間を取らずに進めていた。幼児は次第に集まってはきているが、椅子に座ったままよそ見をしたり、自

分の手をいじったりしている幼児もいた。毎回同じことが同じように進行し、即興性がないことにより、手遊び歌そのものに飽きている様子であった。

手遊び歌では、毎回必ず同じことが起きるのではなく、何か異なることが起きたり、一人一人の幼児が自分なりの楽しみ方を見出せるような間を設けたりすることにより、幼児が手遊び歌に対して主体的に関わりとうとする姿が引き出されていることが示唆された。また、非熟達保育者Yは、手遊び実演中に幼児とのコミュニケーションを大切にするあまり、個々の幼児が独立して保育者と関わる行動が多く出現する状況も見られた。これらのことから、手遊びにおける即興性はイレギュラーな事態が生じることによる単なる驚きや注意の切り替えではなく、演目内容とその瞬間の子ども理解との調和によって生み出されるものと考えられる。熟達保育者によって生み出された環境として整合性のある即興性によって手遊び自体の楽しさが増した時、幼児はその楽しさを感じながらもっと楽しみたいと主体的に手遊びの世界に没入するフロー体験が生じていたことがわかった。また、このようなフロー体験は、手遊び実演時に限った保育者と幼児との関係でのみ生じるものではなく、日々の保育で築かれた、保育者と幼児の関係性の中で形成された「楽しいことがありそうだ」という期待感の影響があることも示唆された。

【研究の展望（今後について）】

今回の調査により、保育者の技術や意図によって手遊びの楽しさが変化し、より楽しいと感じられる手遊び場面では幼児た



ちが自ら手遊びの世界に関わり楽しさを深めていく姿が見られた。しかし手遊びの楽しさを変化させる技術的要素の質的側面の詳細と、幼児のフロー体験出現の発生機序や行動的（生理的）指標の詳細な分析までは至らなかった。今度、より客観性の高いデータ収集を含めながら、手遊びの楽しさの解明と本来的・臨床的意義の提案につながるよう研究を継続していきたい。

※國學院大學人間開発学会第十六回大会（令和六年九月二十八日、於國學院大學たまプラーザキャンパス二〇一教室）第二部「令和五年度人間開発学部学部共同研究成果報告」において、研究代表者の柳生崇志（國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授）及び中野圭祐（國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）が口頭報告と質疑応答を行った。

表1. フローの出現割合

（クラスあたりのフローが出現した幼児の人数の割合）

	熟達 A	非熟達 X
（人数の割合）	35 (%)	0.3 (%)

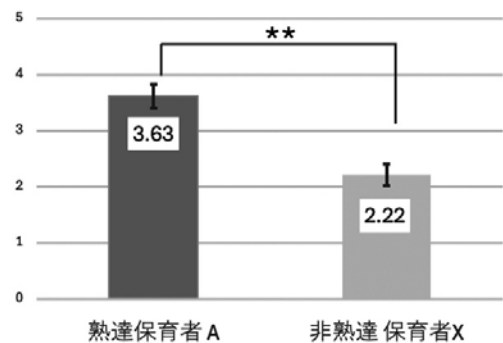


図1. クラスの平均評点（フロー）

** ($t(73.72) = 4.77, p < .01$)